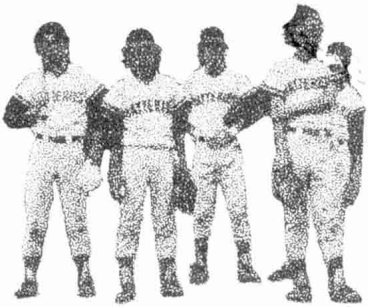
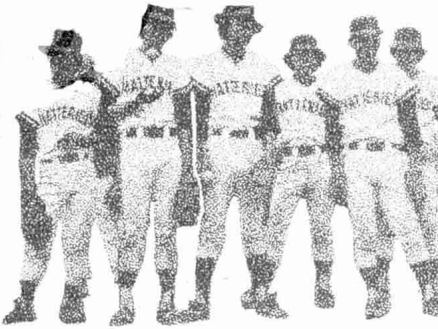
さすらいの甲子園





高橋三千綱

角川書店

昭和五十三年八月　五　日　初版発行
昭和五十三年九月二十五日　三版発行
発行所——株式会社　角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三ノ三
電話(〇三)二六五—七一一一〈大代表〉
〒一〇二　振替　東京三—一九五二〇八

さすらいの甲子園　高橋三千綱

発行者——角川春樹
印刷・製本——大日本印刷
落丁・乱丁本はお取替えいたします
© Michitsuna Takahashi, 1978.
0093-872228-0946(0)

さすらいの甲子園

——レッド・ハッタリィーズの仲間たちに捧ぐ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序章

その年、長嶋巨人軍は、ペナントレースで最下位となった。

その頃、練馬区にある大根畑に隣接した木造二階建アパートの一室で、ひとつの野球チームが結成された。

チーム名、「さすらいの甲子園」。部員、十名。平均年齢、二十六・八歳。そのほとんどが無職、またはそれに近い状況。将来性、なし。既婚者、二。みな、すこぶる健康。

第一章

誇大妄想狂の気味がある、と子供の頃からいわれていた。

あからさまに、君の頭はヘンだ、といわれることもあったし、やんわりと、変っているね、といわれたりもした。成人してからは知的人間との付き合いが生まれたせいで、あなたはロマンチストなのですね、と表現が高尚になってきたが、いずれにしても、私の脳ミソの具合をいぶかしんでいることに変りはなかった。

だが、いつでも私は大真面目だった。真剣であった。

幼稚園でかくれんぼがさかんだった頃、のろまな私は、いつでも一番最初に見つかり、いつでも最後まで鬼をしていた。

みんながあきれはてて家に帰ってしまったあとでも、鬼の私は気づかずに一人で暗い幼稚園の中で、ユーレイが出てきたらどうしよう、と怯えながら便所の中までさまよっていたりした。

疲れはてて上履き袋を下げて家に帰る道すがら、かくれんぼをしていた仲間の家から笑い声が聞こえ、垣根を通して、家族だんらんの中でにこやかに夕食をとっている彼の姿が垣間見えた。

私はとび上がって喜び、窓に寄って、外から、××ちゃん、みいっけた、と叫んだものだった。彼は飯を喉に詰まらせ、翌日私は幼稚園の先生から大変に叱られた。

どうしたらかくれんぼで成功することができるかと考え、ある日私は、幼稚園の屋根に登った。上から、私を捜して呻吟する仲間やうろたえる女の子の姿を眺めながら、私は、これでやっと一人前になれた、と喜んでいた。

やがて夕焼けが空を染め、かき消されるようにあたりが暗くなった。きっといつかは見つけてくれるだろう、と思っている内に私は眠ってしまい、朝になって足首を捻挫してうなっているところを発見され、また先生から大目玉を食った。

その頃から、私は少し変った目で見られるようになった。

三十になった今では、さすがにあれは尋常ではなかったと思えることがらも出てきたが、どうしてそのような行為が、他人から蔑まれなければならなかったのか、理解に苦しむことがらも多々ある。

六歳のとき、甲州街道を府中から、子供用の自動車に乗って、ギコギコとこいで新宿まで行こうとしておまわりさんに見つかり、激しくどやしつけられたが、その行為のどこに不備があるのか、いまだに判然としない。

小学三年生のとき、自分の作った飛行機で空を飛んでやろうと思い立ち、まず手始めに、七十センチほどの長さの胴体のグライダーを、夏休みを利用して作った。紙で家の模型を作ることもできないほど不器用な私としては、それは気の遠くなるほど、困難な作業であった。

その完成した飛行機を持って、私は高尾山に登った。街なかで試みて、もし墜落して他の人に迷惑をかけたら困る、と子供心に思っていた。

実験は成功だった。飛行機は段々畑の上を飛び、川を越えた。近くをとんでいたトンビはびっくりして逃げていった。

やがて飛行機は機首を下げ、滑走状態に入り、昼飯を食っていた農家の居間に突っ込んでいった。

三年後に、胴体三・五メートルの堂々たるグライダーが完成した。ろくすっぽ字も読めない小学生にとっては、むずかしい記号や、文字が並んでいる設計図を解読して主翼の木をけずることは、きつい作業だった。

当時、私の家は、庭だけで百五十坪もある広いところに住んでいたので、作業場所には困らなかった。遊び仲間がいないのを幸いに、私は学校から帰ると、毎日、木をけずった。細かい部分から作っていったので、一年たってもグライダーの形は現われず、焦ったりもしたが、そのときには、野球をやって気を晴らし、そのエネルギーの余勢をかって、作業に没頭した。

完成すると、家に出入りの酒屋の小僧が、オート三輪にグライダーを乗せて、かねてより見当

をつけていた高尾山の中腹まで運んでくれた。

三人の毛色の変った級友がついてきてくれて、途中でオート三輪を降りて、グライダーをエッサ、ホイサとかついで、山道を登ってきてくれた。

私は得意満面になって操縦席に坐っていた。操縦桿には三輪車のハンドルを使っていた。それを握って、崖っぷちに置かれたグライダーに乗っていた。リリエンタールも降参するような場面であった。

三人の級友は、クソッ、重いな、とか、飛ぶかな、とか口々にわめきながら、それでも私の乗ったグライダーを押してくれた。

あっ、と声が聞こえたと思った瞬間、グライダーは崖っぷちから離れた。周囲の樹木や空や畑が回転した。

私は五メートル下の雑木林にグライダーもろとも転落し、額をしたたかに打ち、失神した。その後、三か月間、左腕からギブスがはずせなかった。

それを機に、妄想癖がひどくなった。

その頃私の家では一匹の小さなメス犬を飼っていたが、その体の貧弱なことを悲しみ、これではロクな子供は生まれないだろうと思い、私は、近くである人が飼っていたトラと交尾させることを思い立ち、オリの中に犬を放した。

愛犬は首を噛みちぎられて帰ってきた。重傷であった。その晩、父は、別段怒った様子もなく、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私を普段の眼ざしで見つめて、アホウ、とひと言いった。

さすがに私も自分はどうかしていると思った。人間性にどこか欠陥があるのではないかと考えた。

反省しつつ、中学生になった私は、大学を卒業したての体育の女教師に恋慕して、熱烈なるラブレターをたて続けに書いた。

幼少の頃の思い出から始まり、近頃マスタベーションの回数が極端に増えた、ということまで綿々と書きつづり、女教師との夫婦生活までも想像して描写した。

文筆家生活を始めて数年になるが、あのときほどに、熱心に、心をこめて文章を書いたことはないようだ。命がけの恋といってもよかったろう。

はじめのうちは喜んでいた女教師もしまいに愛想をつかした。自分の愛が正攻法では受け入れられないと知った私は、意を決して彼女の前に佇み、体育館の隅で彼女を押し倒した。

結果は不首尾に終ったが、私は一週間の停学処分を食らい、ショックを受けた女教師は学校をやめてしまい、妻子ある男との不倫の恋へと走った。

やがて高校へ進み、大学へ進みとするうちに私の妄想癖はおさまり、マラソン大会の日に、馬に乗って現われ、失格になったこともあったりはしたが、まあまあの学校生活を送ることができた。高校で生徒会の予算を全て、校内にベンチを置くために使ってしまったときなど、全校生徒から感謝された。

年が経ち、いくつかの旅や恋愛を経験し、私は二十七歳の青年になっていた。
そして、巨人軍が最下位になるという悲報を聞いた。
私は泣いた。肩を震わせて、泣いた。くやしさと、悲しさで、胸が引き裂かれる思いがした。
巨人軍の状態が思わしくないのは、ペナントレース当初から分っていた。何度か豚の貯金箱をこわして後楽園に出向き、三塁側の敵陣に入って声援を送ったが、いずれの試合も、巨人軍は惨敗した。
夏が過ぎると、巨人軍の最下位は、確定的となった。
その頃から、私の膝が怒りとくやしさで、始終震えるようになった。時を同じくして、小説を書く筆が、ぱったり進まなくなった。
それでも私は、心の片隅で信じていた。奇蹟が起こるのを信じていた。何度も、巨人軍が負け続けているのは冗談なのだと思った。長嶋さんは我々をからかっているのだと思った。破竹の四十連勝をして、例年通り最後には優勝するのだと信じていた。
ペナントレースが終ったとき、長嶋巨人軍は、百三十試合のうち、わずか四十七勝しかしていなかった。
勝率三割八分二厘。巨人軍始まって以来の、最悪の成績だった。
泣いている。背番号90が泣いている。
その晩、三百ワットの電気ストーブの前に坐りながら、私は他の二人の仲間と共に、巨人軍の

栄光の歴史を振り返って、悲しんでいた。

ジャイアンツ。偉大なるジャイアンツ。子供の夢ジャイアンツ。

昭和十一年にプロ野球が始まって以来、数々の栄光に包まれてきた巨人軍。

優勝回数二十八回。日本選手権優勝十五回。文字通り日本一の野球チームであり、沢村、スタルヒン、川上、長嶋、王をはじめ、数多くの名選手を生んできた常勝軍であり、大リーグに匹敵する実力とチームワークを誇ってきた巨人軍なのである。

それが、長嶋巨人軍になったとたん最下位とは、あんまりではないか。クリーンベースボールをうたってフェアープレイに努めた長嶋監督を、無能者呼ばわりするなんてひどいではないか。

名選手、長嶋茂雄の経歴に傷がつく。偉大なる背番号3が、嘲笑と罵声の中で引き裂かれる。

そう考えただけで、私の胸は苦しくなった。

思えば、背番号3は、私の青春であった。

高尾山に登って小型グライダーの試験飛行を行った頃、長嶋茂雄は、立大の学生服を脱いで巨人軍のユニフォームを着た。

そして、いきなり、ホームラン王と打点王に輝いた。首位打者にも手の届きそうな活躍であった。

私が女教師を押し倒して停学になったとき、テレビをひねると、背番号3が、闘志に満ちた顔で、バットを振るっていた。いつの日か、この人と会話をすることができれば、と私は停学の二

文字を頭に刻み込みながら願っていた。

農耕馬に乗って甲州街道を突っ走り、担任から頭をはたかれて怒鳴られたとき、長嶋茂雄は多摩川で汗を流していた。スランプに苦しみ、そこから脱出しようと必死でもがいていた。

数日後には、背番号3がゆっくりと、歓声の中、後楽園グラウンドを一周していた。燃える男の瞳に、ナイターの灯が映ってひらめいた。

長嶋が引退した日。私は夜空を眺めて何度も深い溜息をついていた。

オレの青春は終った。

そう思っていた。今後はひっそりと生き、陰ながら、長嶋巨人軍を応援しよう。空を飛ぼうとか、高嶺の花の女をみじめったらしく追い駆けたりせずに、つれづれなるままにの心境でもって、静かに残った人生をみつめてみよう、と考えていた。

それが、わずか一年でくつがえされることになろうとは、私は夢想だにしていなかった。

「なんとかしなくてはならない」

二人の仲間と共に、六畳間の一隅に坐りながら、私は肩を小刻みに震わせて呟いていた。

他の二人も肩を震わせていた。

私の震えは、悲しみと怒りのためであったが、他の二人は寒さのためであった。十月下旬の冷たい空気を、微弱な電気ストーブでは、充分に温めることができなかったのである。

「長嶋茂雄を救わなくてはならない」

張りつめた気持で、私は再び呟いた。

「そうムキになるなよ」

私の隣にいる坐高の高い男が、あきれ返った顔で、私の肩を叩いた。「さすらいの革命家」という猛々しい名の男である。

「このままじゃ、長嶋巨人軍はだめになる」

いくつかの青春時代のひとこまを思い浮かべながら、私はいった。革命家は、だけどなあ、といってあくびをした。

異様に突起したシシ鼻、ゴリラのような分厚い唇、白いところばかりの目玉。そのだれが見ても憎たらしさを感じる顔を私に向けて、彼はのんびりとした口調でいった。

「巨人を救うったって、駆け出しのヘボ作家に何ができるのよ。おれたちはまだ晩飯前なんだぜ」

彼の言葉は、私の核心に触れてきた。夜十時を過ぎてはいたが、諸般の事情により、我々はまだ夕食前だったのである。

「しかし、巨人軍の敗戦をすべて長嶋茂雄さんのせいにする風潮は許せない。あまりに勝手すぎるじゃないの」

「じゃ、誰が悪いんだよ」

「政治が悪い」

革命家は空腹と驚きのため、ひっくり返った。

政治とひと言にいっては理解に苦しむのだろうが、大リーグと比べると、日本の野球はすべての点でおとっている。

球場が狭い。これは、戦後民主主義のせいである。ポンポンとホームランがとび出せば客がたくさん見に来て喜び、戦争中の悪政を水に流してくれるだろうと政府が考えたのが第一の原因である。

そのため、王貞治がいくらホームランをかっとばしても、大リーグでの評価は低い。二百九十五フィートのホームランと聞いて一番最初に笑うのは、アメリカに住む日系人である。日本人として誇りをもてないからだ。ドジャースタジアムなら、それは深めのライトフライなのだ。

だから、大リーグで使いものにならなくなった選手が日本に来て、高給をとっても、だれも不思議がらなくなる。外野フライがホームランになるのだから、彼等はラクだ。

大リーグを真似て作った野球のくせに、日本の野球には、大リーグのきびしさがない。この際、体力など問題ではない。

報酬が低いため、日本の選手は、ごく一部のハッスルプレイヤーを除いて、なんとか適当に、選手寿命をのばそうとする。まともにやって身体をこわしたら元も子もなくなるからだ。二軍までしかない日本のプロ野球ではそれでも通用する。

ところが、大リーグでは、メジャーリーグから始まって、三A、二A、一A、と強い選手がひ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com